

ライプツィヒ大学教育学部来日記念講演会（その3）

ライプツィヒ大学「ジェンダー小事典」
研究・ネットワーク「多様性を教える」
ザクセンの基礎学校のための SEP

Das Gender Glossar der Universität Leipzig
Forschungs- und Netzwerkstelle „Vielfalt Lehren!“
SeitenEinsteigerProgramm (SEP) für Grundschulen an der Universität Leipzig

バーバラ・ドリンク (Prof. Dr. Barbara DRINCK)
訳：牛田伸一 (Shinichi USHIDA)

『教育学論集』第70号

(2018年3月)

ライプツィヒ大学教育学部来日記念講演会（その3）

ライプツィヒ大学「ジェンダー小事典」
研究・ネットワーク「多様性を教える」
ザクセンの基礎学校のための SEP*

Das Gender Glossar der Universität Leipzig
Forschungs- und Netzwerkstelle „Vielfalt Lehren!“
SeitenEinsteigerProgramm (SEP) für Grundschulen an der Universität Leipzig

バーバラ・ドリンク (Prof. Dr. Barbara DRINCK)

訳：牛田 伸一 (Shinichi USHIDA)

I. インターネットにおけるジェンダー知識
——ライプツィヒ大学「ジェンダー小事典」

Prof. Dr. Barbara Drinck, Daniel Diegmann,
Tobias Würfel, Juliane Keitel による共同研究

最初は2003年ベルリン自由大学で、2008年からはライプツィヒ大学で、同大学の女性・性別研究センターの Ilse Nagelschmidt 教授とメルゼブルク大学の Heinz-Jürgen Voss 教授とともに、オンライン「ジェンダー小事典」を刊行しています。このプロジェクトは現在5人の編集委員によって取り組まれていますし、私の研究領域にかかわってくれています。

1. インターネット上で「ジェンダー小事典」を編纂する理由

ここ15年間のウィキペディアなどオンライン事典の急速な拡大と大規模な増加にもかかわらず、一定の時期が来るといつものように、こうした拡大と増加に対する批判の声が多くなります。このとき、そうした批判はほとんどが原稿内容の質や公にされる情報の価値の問題に関するものですが、倫理的問題も挙げられたりもします。

* 2017年11月21日(火)14時50分～17時に創価大学教育学部(B303教室)においてライプツィヒ大学教育学部来日記念講演会が開催された。本稿はこの講演会でのドリンク教授による講演原稿を日本語に訳出したものである。

たとえば、著者が不明だったり、あるいは匿名の著者が書いていたりする場合には、公にされた原稿の責任が減少したり分散したりする結果が考えられます。性別問題を注意の焦点にする観点からも、最近では様々な批判点が投げかけられています。これらは一方では利用者における女性の数に関するものだったり、百科事典の著者における女性の割合に関するものだったりします。また他方では、ウィキペディアなどのプラットフォームで公表されるテーマや内容に批判が向けられたりもします。

Wikimedia-Fundation の調査研究によると、いわゆるこうしたオンライン事典等の読者の中で70%が男性であるのに対して女性はわずか30%となっています。原稿の書き手も、それが女性であるか男性であるかについてはもっと差があります。これまで実施された調査が示すのは、書き手の女性の割合は今のところ9%から16%の間で推移しています。このとき特別な注目が向けられなければならないのは、ウィキペディアの活発な利用者、また管理権限のある利用者で見ると、女性の割合はさらに低くなっているということです。

オンライン事典の女性による書き手の割合の低調さが結論されるわけですが、これはおそらくは公にされる原稿の内容にも影響があります。ウィキペディアでの文化とジェンダーのバイアスに関するこれまでの数少ない研究が暗示していることは、女性に関する明示的かつ含意的なテーマについては、百科事典の原稿資料ではごく僅かしか存在しないこと、そして書き手のテーマ選択は性別の特色を持っているということです。

2. 「ジェンダー小事典」

こうした批判を背景にして、私たちはライブツイヒ大学でオンライン小事典を開発しました。ここでは、性別のテーマが示されるばかりでなく、焦点化されて、そしていわゆるジェンダー・バイアスを回避することが試みられています。

「ジェンダー小事典」はオンラインで検索可能な事典です。そこでは、性別やセクシャリティに関する知識が多視点的ならびに専門分野横断的かつ専門分野を超えて描写され、それらが公共的にアクセス可能にされています。「ジェンダー小事典」の目的は書き手や利用者に無料で、学問的に基礎づけられ、そして引用されるに耐え得るオンライン参考図書を構築することにあります。ここでは、ジェンダー研究からの概念、テーマ、人物、そして組織に関する原稿がオンラインで利用可能となっています。

定評のある学者との協力を得て、彼らがピアレビューの審査方法を用いて査読者となりました。彼・彼女等によって公にされる原稿は質やアクチュアリティが保証されています。内容の更新が必要になると、古くなったものは長期間保管されます。そうすることで、「ジェンダー小事典」の支援をもって、研究重点の展開に関する歴史的な研究も将来的に可能になります。

オンライン「ジェンダー小事典」は、2003年ベルリン自由大学の「小事典・性別研究」というプロジェクトから始まりました。このプロジェクトが学問的な共同研究

の道を求めたのは、オンラインによるインフォメーションとインターネットのサイトの情報ソース能力が、基準に関する乏しい細分化を理由にして、疑われていた時期でした。ドイツ語版ウィキペディアのような、地域ベースのプロジェクトは、2003年に一万件の論稿を収録したわけですが、それは学問的な慣例の軽視にもかかわらず、たとえば私たちの「ジェンダー小事典」のような信頼できるプロジェクトにとっては競争となりました。私は2006年にライプツィヒ大学に籍を移し、2010年に教育学部の教授職を引き受けましたが、それ以後ではオンライン「ジェンダー小事典」は、私や研究助手のチームによって視覚的にも構想的にも改良が施されています。

ドイツ全土で一つのだけのオンライン「ジェンダー小事典」は、2013年7月の公的な再スタートから、学問的な論考を安定して拡大する数量を用意して、概観的な論考集の形式におけるオープンアクセスできる刊行物として、障壁なく多くの読者が利用できるようにしています。2016年2月からはさらに「ジェンダー小事典」は雑誌としてリストされ、電子データの長期間保存によって利用可能になっています。

3. このプロジェクトのまとめ

オンライン「ジェンダー小事典」によって、現在のところ長期間にわたるプロジェクトが確立しています。これは先ほど述べた問題に少なくとも3つのレベルでかかわることができます。

- (1) 「ジェンダー小事典」において、ジェンダー問題やジェンダー研究と関連のテーマについて、広範囲かつ学問的に基礎づけられた知識が、オンラインでいつでも自由に使えるように準備されています。これに伴い、この知識は、多くは感情的に行われるテーマ領域ですが、これとの事実的かつ信頼できる公共世界の対峙に寄与することができます。
- (2) 編集委員チームと査読者との協力の中でジェンダー・センシティブにコミュニケーションが交わされ、集中的に原稿の質について作業が進められました。これを通して書き手は人格的に自己自身を発展させ、そしてジェンダーの学問的な共同体につながるという可能性を得ています。それは男性の書き手にも女性の書き手にもそうでした。原稿の題目の編纂に応募したり、自分のテーマを持ち込んだりと、特に女性の書き手にとっての障壁は、これまでのところ見られません。
- (3) 「ジェンダー小事典」の編集委員チームを通して確立され、そして保証された書き手の役割分担、webサイトの管理、そして形式的・技術的な作業段取りの引き受けは、この小事典に取り組む機会を、特に書き手に障壁なく提供することを支援してくれています。

このような対応に基づくと、根拠を持って仮定できるのは、オンライン「ジェンダー小事典」はジェンダー・バイアスを広く回避し、あるいは少なくすることができます。

るということです。

Gender Glossar/Gender Glossary (2017). www.gender-glossar.de を参照

II. 研究・ネットワーク「多様性を教える」

Prof. Dr. Barbara Drinck, Dr. Carolin Vierneisel による共同研究

1. 研究開始の状況と現在の状況

若い人間が民主的な学校文化に参加することを通して将来の多様性ある社会における生活へと準備されるべきである。このような教育についての理解によると、LSBT*I*Q (lesbisch, schwul, bisexuell, trans* und inter* の略語、いわゆる LGBT) の人々の差別に手を貸し、子どもに大きな心理的・社会的な影響を持ち得るような、男女の性別を規範とする支配的な学校文脈や学校文化は問題あるものとしてあらわれてきます (Kleiner 2015)。具体的には、LSBT*I*Q の子どもは今後の学校におけるオープンなかかわりによる否定的な結果を恐れているばかりではなく、そうした若者のほとんど半分が、そうしたオープンなかかわりに対する否定的な反応の体験について語っています。それはたとえば、侮辱あるいは仲間はずれなどです (Krell & Oldemeier 2015)。

この領域の研究が示しているのは、ベルリンにある学校の生徒のほぼ4分の1しか、教師による LSBT*I*Q という生き方に関する当たり前のような言及を、あるいは比較的長いテーマ化を経験していないということ、そして教師自身も LSBT*I*Q の同僚についての知識を持ち合わせていないことが大多数であるということです (Klocke 2012)。さらに困難なことに、質問された教師たちは、性的な多様性の領域における継続教育を受けていないということを語っています (ebd.)。

こうしたことを背景にして、高等教育は教師教育の場としていっそうの義務を果たすこととなります。それは、駆け出しの教師に LSBT*I*Q の領域における批判的・反省的な知識や行為能力を支援し、そしてそれによって LSBT*I*Q の子どもや大人の差別の解放に長期的に寄与するためです (Heitzmann & Klein 2012; Huch & Lücke 2015)。

2. 目的、ターゲット・グループ、そして構造枠組み

この研究開始の状況を念頭にして、2017年4月に研究・ネットワーク「多様性を教える」がその活動を始めました。これは、ライプツィヒ大学における多様性と LSBT*I*Q にセンシティブな教員養成を支援して、そしてそのため重要な関係者に対して、多様な性に敵対するような文脈における批判的・反省的な知識、態度、ならびに行為能力を発展させるという目的を追求しています。これによってこの「多様性を教える」は、「LSBT*I*Q にセンシティブになる」という領域における教授の質の確保や拡大に寄与しようとしています。

この目的を達成するために「多様性を教える」は、教員養成に携わる教員や講師、教育学部事務の助手、教員養成の組織の執行部、そして教員養成を受けている学生などのターゲット・グループを形成しました。

この研究・ネットワーク「多様性を教える」には2年半の期間がありました。それはライプツィヒ大学の学校教育学や学校開発研究の教授と女性・性別研究センター、そして Waldschlösschen アカデミーの協力によって実現されています。

およそ総額 157,000 €の助成金が、Waldschlösschen アカデミーのモデル・プロジェクト「多様性の受容—多様な性 (Homo, Trans, Inter) に敵対することに対抗する」を経由して実現しました。それは、「家族、大人、女性、そして若者を管轄する省」(訳注：日本の省庁区分では説明できない)の「民主主義を生きる！」の研究資金からのものです。

3. 理論的な結びつきと導出

記述した目的を達成するために、この研究・ネットワーク「多様性を教える」の活動は次のような中心構想に基づいています。

- ・ 異性の規範性 (Hartmann & Klesse 2007)、つまり男女2つの性別とこれを前提としたセクシャリティ
- ・ セクション間の交流 (Crenshaw 1989; Walgenbach 2012)、つまり異なる権力関係、あるいは個別カテゴリーの絡み合い
- ・ 多様な生のあり方の教育学 (Hartmann 2002)、すなわち権力批判を土台にした行為アプローチ、多様性という一つの観点から多様性を考えること

4. 活動プロフィールと実践

研究・ネットワーク「多様性を教える」の目的を活動プロフィールの形式にすることは、外部専門家審議会による活動、ネットワーキング、助言、そして支援といった継続的な取り組みの下に行われています。また、革新的な提供プログラムの質開発プロセスも柱になっています。

革新的な提供プログラムの開発プロセスの枠組みの中では、まずは、教えるということにおける性と性別の多様性に関する知識、意味づけ、そして必要性について、質問紙に基づく現状分析と需要分析が教員養成に携わる講師に実施されています。これを土台にして、ライプツィヒ大学の教育養成における講師の感受性、能力向上、活性化のための革新的な提供プログラムが開発されています。

Ⅲ. ザクセンの基礎学校のための SEP

Prof. Dr. Barbara Drinck, Dörte Gollek による共同研究

すでに 2000 年から教師の大量退職の波が予想されていました。それと同時に反対に外国からの流入や出生数の上昇などから、生徒数の増加が見込まれていました。この傾向は近年ではいっそうはっきりするようになっていきます。予測によると、2025 / 26 年度までだけでも、およそ 30,800 人の教師がザクセン州では公立学校に必要とされます。

教師を獲得するために、大学教育を基盤とした認可のある教員養成数の拡大と並んで、異業種からの小学校への採用を認めるという措置が取られています。あらゆる児童生徒に授業の提供を保証するためです。こうした異業種からの中途採用者はライプツィヒ大学で初等教育のための SEP（異業種からの中途採用者プログラム *SeitenEinsteigerProgramm*）の支援を受けて、働きながら教職の資格能力を獲得すべきこととなっています。これによって、彼・彼女等は正式な教師としてザクセン州の教育制度の中で認められることになります。

試行プロジェクト計画に参加した機関は、ザクセン州文部省（*Sächsisches Staatsministerium für Kultus: SMK*）、ザクセン州教育エージェント（*Sächsische Bildungsagentur: SBA*）、ライプツィヒ大学、そして教師教育・学校研究センター（*Zentrum für Lehrerbildung und Schulforschung: ZLS*）でした。次のプログラム参加条件が計画の枠内で決められました。すなわち、このプログラムに関心がある人々は教職に関係はないが、小学校に重要な教科に適合した高等教育修了資格を証明することができなければならない。ザクセン州の小学校の常勤として勤めなければならない。半分の授業実施時間（14 / 28 授業時間）で収入の 50% が減額となることを受け入れなければならない。このような条件でした。

SEP は、その構想後はじめて試験的に実施されました。最初の期間は 2015 年 2 月から 2017 年 2 月で、働きながらライプツィヒ大学で学問的な職業教育を受けることを含むものでした。事前準備を済ませた後で、4 つのセメスターが続きました。そこでは、数学、ドイツ語、事実教授（訳注：総合的な学習の時間）、ならびに授業効果研究、そして発達心理学における教科専門的かつ教授学的な基礎が学習されることになりました。この期間内で受講している中途採用者は、月曜日から水曜日まで配置された学校で授業をして、木曜日と金曜日のライプツィヒ大学の授業に参加することを義務づけられました。

最初の 24 名のプログラム参加者の内 20 名がこの学問的な職業教育を首尾よく修めましたし、彼・彼女等は 2017 年 2 月からは第 2 の期間に入っています。それは、ザクセン州教育エージェントによるセミナーを含む 1 年間のフルタイムの試補教員としての活動です。試補教員期間が首尾よく終わる 2018 年 2 月には、プログラム参加者

はザクセン州の正式な教師になります。

学問的な職業教育を同時並行で受けながら、2016年2月から2017年2月までSEPの評価が、ザクセン州小学校における教師の職能や授業提供の保証に対する有効性や効果の観点から行われました。そのために、参加者、大学教員、プロジェクトの責任者、ならびに学校の同僚が質問紙やインタビューによって調査されました。

要約的に次のような積極的なフィードバックを挙げることができます。参加者は教科における方法論や教授学の修得や深化を強調しています。そうしたことが初めから授業実践に移されました。さらには大学教員やプロジェクトのコーディネーターによる面倒見のよさや個別的な助言も強調されています。参加者グループ内での強い結びつきが確立されていました。このプログラムをやっていくやる気をいつも沸き立たせていた要因の一つは、職業教育後の正式な教師の地位やより高い収入等級への見通しでした。

次のような点に関して批判的な見方がありました。学問的な職業教育、ないしは試補教員を経る中でコミュニケーションや情報伝達の不足や性急さが一部分はあったことが分かりました。また大学で勉強をする中で実践との関係が乏しいことが多かったということが表現されています。さらには自宅学習や追加的な学習の過多や試験準備の時間や余暇の短さも報告されました。給与が半額になることによる家計的な難点や情緒的かつ精神的な負担（ないしは過剰負担）も述べられていますが、これによって参加者がこの課程をやめようという思いをもったと言われています。

プログラムに関する願いは多く寄せられています。概括的に述べれば、参加者は職業教育の経過について一貫して明確な系統や明確な構造を、またプログラムにかかわる諸機関の間の透明性あるコミュニケーションを望んでいたということでした。これとの関連で、参加者は、小学校の現実条件の顧慮の下に、職業教育における実践的な方法の組み込みをさらに徹底して求めていました。参加者は学校でメンターがかかわってくれることも望んでいました（2016 / 2017年年度からは、異業種からの中途採用者は学校でメンターが配置されることになりました）。参加者によると、試験期間の日程が学校の予定計画との調整の下に設定されるべきだということでした。それは、異業種からの中途採用者が余暇を持てるようにするためです。就労と同時並行で行われる職業教育の間は給与が減額されることに関しては、参加者はより高い給与をはじめから望んでいました（2016 / 2017年度からはより高い給与等級で働き始めています）。質問を受けたグループによって、ザクセン州における異業種からの中途採用者の必要性に関する社会への説明の重要性が述べられました。すなわち、反対する人々の推測に対して、プログラムの参加条件によって証明しつつ、異業種からの中途採用者は、単なる「道を歩く人々」（つまり教育の素人）ではないということを説明することです。

SEPの評価に関して、またそのパイロット事業に関して顧慮されなければならない

いのは、以前の教員養成コースから比較できる経験がほとんどないということです。その結果として、与えられた評価はプログラムを最適化するための基盤として見なされることとなります。

将来的にはライプツィヒ大学の SEP は、少なくとも 2021 年までは継続します。この期間内では見通しとしておよそ 300 人の小学校教師、また 500 人の小学校以降の学校や特別支援学校の教師が要請されます (Zentrum für Lehrerbildung und Schulforschung (ZLS) (2017): <<http://www.zls.uni-leipzig.de/157.html>>)。2017 / 2018 年冬学期からは小学校、特別支援教育、そして第 2 言語としての英語とドイツ語のための新しい職業教育グループが始まりました。2018 年夏学期からは、物理、化学、生物学、そしてドイツ語 (中等教育第一段階) における異業種からの中途採用者が養成されます。

引用・参考文献

- Crenshaw, Kimberlé (1989). „Demarginalizing the Intersection of Race and Sex. A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics“. The University of Chicago Legal Forum, 139-167.
- Diegmann, D. & Keitel, J. (2015). Gender Bias in Online-Enzyklopädien. In: Barke, Helena/Siegeris, Juliane (Ed.): Gender und IT-Projekte. Neue Wege zu digitaler Teilhabe (1st ed.). Leverkusen: Budrich UniPress Ltd.
- Hartmann, Jutta (2002). Vielfältige Lebensweisen. Dynamisierung in der Triade Geschlecht – Sexualität – Lebensform. Kritisch-dekonstruktive Perspektiven für die Pädagogik (Forschung Erziehungswissenschaft, Bd. 157). Opladen: Leske + Budrich.
- Hartmann, Jutta & Klesse, Christian (2007). Heteronormativität. Empirische Studien zu Geschlecht, Sexualität. In: Kristina Hackmann (Hrsg.): Heteronormativität (S. 9-15). Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Heitzmann, Daniela & Klein, Uta (2012). Diversity konkret gemacht. Wege zur Gestaltung von Vielfalt an Weinheim: Hochschulen. Beltz Juventa.
- Huch, Sarah & Lücke, Martin (2015). Sexuelle Vielfalt im Handlungsfeld Schule. In: Huch, Sarah & Lücke, Martin: Sexuelle Vielfalt im Handlungsfeld Schule. Bielefeld: Transcript.
- Kleiner, Bettina (2015). Subjekt Bildung Heteronormativität. Rekonstruktion schulischer Differenzenerfahrungen lesbischer, schwuler, bisexueller und trans*Jugendlicher (Studien zu Differenz, Bildung und Kultur, Bd. 1). Opladen: Budrich.
- Klocke, Ulrich (2012). Akzeptanz sexueller Vielfalt an Berliner Schulen: Eine Befragung zu Verhalten, Einstellungen und Wissen zu LSBT und deren Einflussvariablen. Berlin:

Senatsverwaltung für Bildung, Jugend und Wissenschaft.

Krell, Claudia & Oldemeier, Kerstin (2015). Coming-out – und dann ...?! Ein Forschungsprojekt zur Lebenssituation von lesbischen, schwulen, bisexuellen und trans* Jugendlichen und jungen Erwachsenen. In: Deutsches Jugendinstitut (Hrsg.). München: DJI.

Walgenbach, Katharina (2012): Intersektionalität - eine Einführung. Zugriff am 23. 08. 2017. Verfügbar unter www.portal-intersektionalität.de